

## ペテロの手紙第一3章「悪の中で柔和な行い」

### 1A 妻と夫の生活 1-7

#### 1B 妻の服従 1-6

#### 2B 夫の同伴 7

### 2A 迫害者への対応 8-17

#### 1B 祝福を受け継ぐ召し 8-12

#### 2B 善のための苦しみ 13-17

### 4A 霊どもを従えるキリスト 18-22

## 本文

ペテロの第一の手紙 3 章を開いてください。私たちは、前回、聖なる祭司として私たちが召されているところを読みました。イエス様が、生ける尊い石として要の石となっている建物に、霊のいけにを献げている祭司です。そして、選ばれた種族、聖なる国民、王である祭司、神のものとされた民として、召されていることを見ました。しかし、その尊い石は、見捨てられた石であり、信じない者にとっては、つまずきの石、妨げの岩でもあると読みました。人々から拒まれ、見捨てられ、迫害されることがあるけれども、神の祭司として、その中で主にお仕えするという召しを受けています。

その中で、異邦人の中では、立派なふるまいをしなさいとペテロは勧めています。悪人呼ばりしても、言い返すのではなく、立派な行いをする事で、相手が神をあがめるようになる、つまり、証しを立てられるということです。

そして、ペテロは具体的に、人間の制度には従いなさいと教えます。王にしても、総督に対してもそうであり、すべての人を敬って、兄弟愛を抱き、また、神を恐れるゆえ、王を敬いなさいと教えていました。そして、ローマ社会には奴隷制度が浸透していました。キリスト者にも、奴隷の身分のものがたくさんいたのです。ペテロや他の使徒たちの教えは、その制度の良し悪しを語っていないことです。その制度の中で、神の国が広がることを願っているのです。それは、私たちがへりくだって、主にあって仕えていく時に、主ご自身が働いてくださり、人々に影響を与えていきます。

### 1A 妻と夫の生活 1-7

そこで 3 章は、「同じように」と続きます。

#### 1B 妻の服従 1-6

<sup>1</sup> 同じように、妻たちよ、自分の夫に従いなさい。たとえ、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって神のものとされるためです。<sup>2</sup> 夫は、あなたがたの、神を恐れる純粋な生

き方を目にするのです。

夫婦の関係においても、主にあって従うという姿勢を持ちなさいと、妻たちに対してペテロが勧めています。「みことばに従わない夫であっても」とありますね。未信者の夫です。2章でも、しもべたちに対して、「善良で優しい主人だけでなく、意地悪な主人にも従いなさい。(18節)」と教えていました。神を知らない人々の間で、奴隷制度や、結婚制度の中で、従うことによって証しを立てなさい、ということです。

当時のギリシア文化やローマ社会では、妻は家の中にいる者であり、外に友だちと遊びに出るようなことをしたら、不徳とされました。そして、夫と同じ神々、宗教を持たなければいけないとされていました。日本にも通じるところがありますね。「家内」という言葉があります。そして夫が檀家に入っているのだから、自分もしっかりと檀家を守らなければいけないと考えます。

したがって、信仰を持っているということだけで、かなりの圧力をその家に、また夫にかけることになります。彼女が夫と同じ宗教を持たないことによって、家の秩序を乱すことになります。そして教会に行くことによって、夫以外の友を作るという、不徳な行為と容易に見なされます。ただでさえ、キリスト者として、その信仰生活を営むことで、夫の権威に挑みかかっているようにみなされます。

いかに妻は夫に証を立てることができるのでしょうか？従うことによってであります。それが、「妻の無言のふるまいによって」とありますね。これは、行いによる伝道です。ただでさえ、自分がキリストに従っているということで、脅威に感じ、自分の権威に挑みかかっていると思っている夫がいます。言い返したりしたら、ローマ社会では反体制的とさえ受け止められません。そういう時に、夫に対して従っている姿を見せることで、夫が神のものとされるとあります。

「神を恐れる純粋な生き方」とありますが、ギリシア語本文には、「神」はありません。もちろん、神を恐れかこむ生き方なのですが、夫にもその畏れ敬いが伝わってくる生き方です。そして、「純粋な」とあります。これは、みことばによって養われますね。心の清さです(2:2)。

<sup>3</sup>あなたがたの飾りは、髪を編んだり金の飾りを付けたり、服を着飾ったりする外面的なものであってはいけません。<sup>4</sup>むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人を飾りとしなさい。それこそ、神の御前で価値あるものです。

髪を編むのは、ここでは美容師が行なうようなものです。かつらも当時、はやっていたようで、金髪のものが好まれたようです。そして金の飾りは、首、くるぶし、腕、指などに身に付けるもの。そして、ここでの着物は実用性のある服装ではなく、着飾るためだけのものを指しています。

ペテロがここで言っているのは、これら外面の着飾りをしてはいけないということでは、ありません。それが自分の美を求める、主な動機になってはいけないということです。そうではなく、**心の中の隠れた人**が真の美であるということを強調しているのです。他の箇所、パウロがテモテに、「**肉体の鍛錬も少しは有益ですが、今のいのちと来たるべきいのちを約束する敬虔は、すべてに有益です。(1テモテ 4:8)**」と言っていますが、それは、肉体の鍛錬を否定しているのではなく、おもに求めるべきものは、**霊な鍛錬である**ということです。柔和で穏やかな霊は、化粧や着飾りのように朽ちるものではなく、朽ちないものですよということです。

「**柔和で穏やかな霊**」ですが、これは、なよなよしたものではありません。それは聖書では「臆病」と呼ばれます。人を恐れて、弱くされているのは、柔和でも穏やかでもありません。柔和は、仕返しをしないということです。穏やかは、圧迫がかけられても、主にある平安を保っている状態です。箴言 31 章に、「**しっかりした妻**」が出てきます(10 節以降)。30 節にこう書いてあります。「**31:30 麗しきは偽り。美しさは空しい。しかし、【主】を恐れる女はほめたたえられる。**」ペテロが、ここで言っていることですね。そこに出てくる妻は、本当にしっかりしています。男のような、いさましさを感じます。芯がある強さです。しかし、その意志を家のために、夫のため、子どもたちのために使っています。柔和な穏やかな霊です。

そして「**神の御前に価値あるもの**」とあります。人の前に見えるところには価値はないかもしれない。けれども、神の御前には価値があります。

<sup>5</sup> かつて、神に望みを置いた敬虔な女の人たちも、そのように自分を飾って、夫に従ったのです。  
<sup>6</sup> たとえば、サラはアブラハムを主と呼んで従いました。どんなことをも恐れなくて善を行うなら、あなたがたはサラの子です。

ペテロは、旧約聖書に出てくる女たちの話をしています。「**神に望みを置いた**」ということが、敬虔さを作り上げています。夫に望みを置くのではないのです、神に望みを置きます。

その典型例が、アブラハムの妻サラです。創世記 18 章 12 節にて、サラはアブラハムのことを「主人」と呼んでいます。日本語ではありふれた呼び名ですが、これを「主」と言えば、もっと重みがあるでしょう。サラはどのように、アブラハムに従ったのでしょうか？アブラハムは神を信じて、神の言われたことに従順でありました。そのアブラハムに、彼女は神に望みを置いて従ったのです。夫婦というのは、「**徹底的に、キリストに従う夫**」がいて、そして「**徹底的にキリストに従う夫に、とことん従う**」という妻がいて成り立ちます。そして、不信者の夫であれば、「**主にあって夫に、徹底的に従うこと**」によって、それで夫の魂を神にあって勝ち得る。」ということです。

そして、「サラの子です」という言葉ですが、聖書では従順になれば、その子になるという考え方があります。アブラハムの信仰に倣えば、アブラハムの子になります。光の中を歩めば、光の子になります。そして、「どんなことをも恐れなくて善を行うなら」とあります。恐れないということばが大事ですね。いろいろな意味で、夫についていくことについて恐れが生じるでしょう。しかし、恐れずに善を行ないます。善を行えば、夫がどう反応するか？ということがあるでしょう。夫に何か言われるかどうか？ではなく、自分のほうから夫に何をしようか？と考える時に、善を行えます。

## 2B 夫の同伴 7

<sup>7</sup> 同じように、夫たちよ、妻が自分より弱い器であることを理解して妻とともに暮らしなさい。また、いのちの恵みをとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。そうすれば、あなたがたの祈りは妨げられません。

「同じように」という言葉から始まります。妻が主にあって夫に従うと言っていますが、主の前では全く同じです。その働きや役割が異なり、秩序や順番の話をしています。主に従うということについては、妻と夫は全く変わりません。

初めに夫がすべきことは、「妻とともに暮ら」す、ということです。夫が同じところに経って生活をしていないといけません。いつの間にか、離れていることがあります。ある人が言いましたが、自分の生活がちょうど金太郎飴のように、妻と共に暮らしているか？ということでもあります。

そして夫がわきまえなければいけないのは、「妻が自分より弱い器である」ということです。これは身体的なことを話しています。運動選手権において、男女の区別を撤廃すべきだという人はいないでしょう。明らかに身体に差があるからです。ここで言っているのは、そういった意味だし、またいろいろな意味で生理的に、繊細な部分があります。そういうところに気づかって、生活しなさいということです。

そして、「いのちの恵みをとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい」と言っています。前者が、身体的な事に関する配慮であるならば、こちらは、霊的は尊敬や感謝です。共に生活している妻が、主にある姉妹なのだということを忘れてはいけません。共に神の国を相続するものであり、霊的な支えや助けをいつも感謝し、尊敬の念を忘れてはいけないということです。

そして約束が、「あなたがたの祈りは妨げられません」とあります。妻とともに暮らしていないと、彼女を尊敬していないと、妻は、その弱さと共にいてほしいという願いが強くなり、その欲求を夫にぶつけます。そうすると、主の願いを求め、つまり祈ることができなくなっていくます。祈ることは、リーダーとして男の務めと言ったらようでしょう、主から聞くのです。主から聞いて、それで初めて家を治めることができます。

## 2A 迫害者への対応 8-17

こうやって、神を知らない異邦人の間で立派にふるまうことについて教えました。そして 8 節から、「最後に」という言葉から始まります。これは、手紙の終わりの言葉ではないようです。これまでペテロが語ってきたことを、改めてまとめている、と言ってよいでしょう。

## 1B 祝福を受け継ぐ召し 8-12

<sup>8</sup> 最後に言います。みな、一つ思いになり、同情し合い、兄弟愛を示し、心の優しい人となり、謙虚でありなさい。

ペテロはこの手紙で、キリスト者の生活の両輪を述べています。一つは、教会外に対して立派にふるまいなさいということです。もう一つは、教会内のふるまいです。それが、「兄弟愛を示す」ことです。「1:22 あなたがたは真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、きよい心で互いに熱く愛し合いなさい。」と書いていました。外からの苦しみや迫害において、内にある一致は私たちを励まし、支え、キリストにあって戦うことができます。

まず、「みな、一つ思いに」なることですが、イエスが捕えられる夜に、父なる神に対して祈られた願いがあります。「ヨハネ 17:21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。」終わりの日は、キリストにあってすべてのものが一つに集められることを、エペソ 1 章では話しています。ここに向かって、私たちが走っているのです。

そして「同情し合い」とあります。共に苦しみ、共に喜ぶということです。自分たちが、キリストのからだになっているので、他の人たちが通っていることを完全に切り離すことができないのです。つながっています。そして、「兄弟愛」を示します。次に、「心の優しい人」ということですが、同情以上に、その人の心に自分を合わせている状態です。そして、「謙虚」です。自分が、神の恵みによって救われているということを、忘れていないことです。主にある自分以上にはなれないし、またそれ以下でもありません。

<sup>9</sup> 悪に対して悪を返さず、侮辱に対して侮辱を返さず、逆に祝福しなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのです。

教会外に対する人々に対するキリスト者の態度です。「悪に対して悪を返さず」は、行為です。そして、「侮辱に対して侮辱を返さず」は「言葉」です。行動においても、言葉においても、私たちが悪に対して悪で対抗しないのです。悪に対する報いは神が行なわれます。神に任せて、私たちがその悪を自分も行なうことにとって、自分自身も同じ罪を犯さないようにするのです。

そして、「逆に祝福しなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのです」とあります。祝福するとは、まず良くいうことでしょう。そして、その人のために祈ることです。祝福については、アブラハムに対する神の約束に基づいています。「ガラ 3:9 ですから、信仰によって生きる人々が、信仰の人アブラハムとともに祝福を受けるのです。」キリストにある祝福を受けている者たちは、他の人たちを祝福するように召されているのです。

<sup>10</sup>「いのちを愛し、幸せな日々を見ようと願う者は、舌に悪口を言わせず、唇に欺きを語らせるな。  
<sup>11</sup> 悪を離れて善を行い、平和を求め、それを追え。

これは詩篇 34 篇 12-16 節にある言葉です。ダビデが、子たちに主を恐れることを教えているところです。「いのちを愛し、幸せな日々を見ようと願う者」ということですが、霊的な命、霊的な幸いのことです。キリスト者が不当な苦しみを受けたとしても、それでもそこに命と幸いを見いだすことができます。それは、人を祝福する生活です。

「舌に悪口を言わせず、唇に欺きを語らせるな。」とあります。口を制して、悪口、偽りを言わせないことです。行動にも気を付けます。「悪を離れて善を行い」であります。そして、積極的に「平和」を求めます。求めるだけでなく、意欲的に追っていきます。

<sup>12</sup> 主の目は正しい人たちの上にあり、主の耳は彼らの叫びに傾けられる。しかし主の顔は、悪をなす者どもに敵対する。」

平和を追い求めている人々を、主は正しい人と呼ばれます。この「正しい」の定義が変わりません。平和には、自己正義を求めません、神のみが義なる方であることを認めます。自分が神の前でへりくだることです。その人が正しい人です。

そして、正しい人には、主との親しい交わりや約束されています。主がその人を見てくださっています。アロンの祝祷にあるように、御顔を輝かして、祝福してくださるのです。そして、叫ぶ祈りにも聞いてくださっているのです。そうでない人、争い、妬み、中傷する人には、神は顔をそむけます。

## 2B 善のための苦しみ 13-17

<sup>13</sup> もしあなたがたが良いことに対して熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。<sup>14</sup> たとえ義のために苦むことがあっても、あなたがたは幸いです。人々の脅かしを恐れたり、おびえたりしてはいけません。

良いことを行なえば、人々は害を加えることはない、という一般原則です。今、善を行なって平和を求めなさいとありましたが、そうですね、善を行なっているのであれば、相手はそしる理由がなく

なってしまいます。そして、もしかしたら相手が「彼には、何かがいる。神、キリストがいるのか？」と思うようになることでしょう。

しかし、それでも悪を行ってくる人たちがいます。そういう時でも、幸いですというのがペテロの励ましです。この手紙のテーマです。悪いことをして何か苦しむなら、当然の報いですが、良いことをしているのに受ける不条理は、幸いなことなのだということです。イエス様が、山上の説教で、義のための迫害される者は幸いであり、天からの報いが大いにあると約束されました。

「人々の脅かしを恐れたり、おびえたりしてはいけません。」と教えています。イエス様は、数多くのことを教えられましたね。「ルカ 12:4-5 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」人を恐れるのではなく、主を恐れます。そして、神はあなたの髪の毛さえも数えておられ、人を恐れなくてよいと励ましておられます。

そして、こうも言われています。「ルカ 12:8-9 あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。」人の前で、イエス様を認める、つまり、自分の信仰を明らかにするのです。その方法について次にペテロは話します。

<sup>15</sup> むしろ、心の中でキリストを主とし、聖なる方としなさい。あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしていなさい。

まず、「心の中でキリストを主とし、聖なる方としなさい」ということです。いろいろな場面で、だれを主とするのか？という決断が迫られます。何にもまして、主を愛するという立ち位置にいつも、とどまっています。そして、聖なる方とするとは、あがめるということです。主を主としていくということです。すぐに、私たちの心の目から、主の栄光が離れてしまいます。しかし、主を見つめて、その栄光が自分を照らすようにするのです。

そうして生活している中で、「希望について説明を求める人には」とあります。自分が良いことをしている時に、不思議がられたり、悪口も言われたりするでしょう。けれども、見直す人も出てきます。そうした時に、説明する接点ができるのです。大事なのは、相手から求めてくるということです。相手に、興味や関心が心に呼び起こされるのです。地の塩であると、その塩気によって渴きが起こるのです。そうした渴きを、自分自身がもたらしているかどうか？であります。

そうしている時に、「いつでも弁明できる用意」であります。ここの「弁明」というのが、英語では

apologetics と行って、「弁証論」とか「護教論」とか呼ばれるものです。それは、神を信じない世に対して、キリストへの信仰を証明するという議論、主張であります。けれども、ここでは正確には、もっと生活に密着したことです。キリストにある希望について平易に語ります。

<sup>16</sup> ただし、柔和な心で、恐れつつ、健全な良心をもって弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの善良な生き方をののしっている人たちが、あなたがたを悪く言ったことを恥じるでしょう。

徹底的に、柔和さが求められていますね。ペテロはずっと、妻が夫に従う時も、兄弟愛を抱く時も、悪に対処する時も、ずっと柔和さを求めています。説明の時は、相手の悪徳に反応してはいけません。相手を敬い、また健全な良心から弁明していくのです。そうすると、相手を善によって打ち負かすことができるのです。自分で打ち負かすのではなく、相手が、自分で悪くいったことを恥じるようになるのです。

<sup>17</sup> 神のみこころであるなら、悪を行って苦しみを受けるより、善を行って苦しみを受けるほうがよいのです。

くり返していますね、苦しむのであれば、悪ではなく、善を行って苦しみを受けましょう。悪に対して、自分が悪で返さないように気を付けます。

#### **4A 霊どもを従えるキリスト 18-22**

そして次に、正しいことをしているのに、それで悪いことをされた第一人者として、キリストご自身をペテロは語ります。この時に、18 節から 22 節にかけて、そうした悪や中傷に対して、圧倒的に勝利していることを、霊の世界からペテロは解き明かします。十字架につけられた後に、主が何を行われたのかを詳しく書いています。

<sup>18</sup> キリストも一度、罪のために苦しみを受けられました。正しい方が正しくない者たちの身代わりになられたのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、あなたがたを神に導くためでした。

キリストが何度も苦しみを受けたのではなく、「一度」のみ受けられました。ヘブル人への手紙で学びましたね。ただ一度、この終わりの時にすべての罪を取り除くために死なれました。そして、正しい方が、正しくない者のために身代わりになられたと、私たちが善を行っているのに、悪く言われることに対する、模範として示しています。

次、肉体においては死なれたけれども、御霊においてはそうではないことを教えています。午前

私拝でお話したように、主が死なれる時、よみがえられる時には、御霊が働いておられたのです。「ロマ 1:4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」そして、肉体は死に渡されたけれども、最終的に、私たちが神に導かれるのです。

同じように、私たちは肉体に苦しみを受けても、それで人々が神をあがめるようになるのだ、ということなのです。

<sup>19</sup> その霊においてキリストは、捕らわれている霊たちのところに行って宣言されました。<sup>20</sup> かつてノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに従わなかった霊たちにです。その箱舟に入ったわずかの人たち、すなわち八人は、水を通して救われました。

この箇所は難解であり、教会の歴史において解釈に変遷がありました。そのことを、かいつまんでお話ししたいのですが、その前に、要はペテロがここで言いたいことを話します。細かい解釈の違いに埋没して、本来のペテロの目的を見失うことがないようにするためです。

ペテロは、ここでノアの時代の洪水について語ります。イエス様が、ご自身が来られる時には、ノアの日のようになると言われたように、悪に満ちるのです。その日は、人々が墮落しただけでなく、悪霊どもが暴れ、その悪は極みに達します。けれども、主は確かに裁いてくださり、世を滅ぼしてくださいます。そして、滅びる世から、私たちを救われることを約束しておられるのです。肉においては、今、苦しみを受けていても、霊においては圧倒的な勝利なのだということを語りたいのです。

では、細かく三つの解釈についてご紹介します。第一の解釈は、「捕われている霊たち」は、ハデス、あるいは陰府にいる者たちの霊、という解釈です。ノアの時代に、ノアの説教を聞いても悔い改めなかった者たちがいます。彼らは水の裁きによって死に、陰府に下りました。

あの金持ちとラザロの話のように、陰府、ハデスにはアブラハムの懐という、慰めのところと、熱く燃えている苦しみの所があります。神を侮っていた者たちは、死後、その苦しみの所に入ります。けれども、神を信じていた者たちも、キリストが十字架に付けられる前なので、まだ天に入ることはできず、陰府に下り、アブラハムの懐のところに入りました。金持ちとラザロの話を思い出してください。そして、イエス様が十字架で死なれて、その霊は陰府に下られたということです。

ここで、「宣言されました」とありますが、これは回心のために福音を宣べ伝えたということではありません。贖いが完成したことを宣言するのみです。それで、アブラハムの懐にいる聖徒たちは、キリストと共に天に昇ります。「エペソ 4:8-9 そのため、こう言われています。「彼はいと高き所に上ったとき、捕虜を連れて行き、人々に贈り物を与えられた。」「上った」ということは、彼が低い所、

つまり地上に降られたということではなくて何でしょうか。」ここで聖徒たちは、キリストが天に昇られて、自分たちも天に入ることができます。そして、苦しみのある場所にいる不従順の霊は、そのまま閉じ込められています。そして最後の審判の時によみがえり、裁きを受け、ゲヘナに投げ込まれます。

第二の解釈は、キリストの御霊がノアに留まって、そこにいた不信仰な者たちに対して、義を宣べ伝えたというものです。旧約の聖徒たちも、御霊によって預言をしましたが、それはキリストの御霊であったことが 1 章 11 節に書いてあります。「彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が・・・」とあります。ノアが 120 年もの間、箱舟を造りながらそこに居る者たちに義を宣べ伝え、水の裁きが来ることを警告していたのですが、そこに居る者たちは、その言葉に従いませんでした。ノアのうちに働いておられるキリストの御霊が、この言葉をノアに与えられたのですが、彼らは聞き従わなかったということでもあります。

第三の解釈は、「捕らわれている霊たち」というのが、墮落した天使の霊というものです。これが、午前礼拝で紹介した話です。ノアの時代に、神の子が人の娘に入って妻として、ネフィリムが生まれました。そして、これらの墮落した天使は、地獄に閉じ込められています。その霊どもに対して、イエスが宣言されたということです。

<sup>21</sup> この水はまた、今あなたがたをイエス・キリストの復活を通して救うバプテスマの型なのです。バプテスマは肉の汚れを取り除くものではありません。それはむしろ、健全な良心が神に対して行う誓約です。

ペテロは、水の洪水、ノアの箱舟というものが、バプテスマを示している型であると話しています。箱舟が八人にとって救いとなりましたが、それは水を通して救われました。同じように、キリストの内にある者は、水の中に入ることによってキリストと共に葬られ、水から出ることによってキリストと共に甦ります。このキリストとのつながりによって、神の救いを受けます。ノアの家族八人が、箱舟によって水の中を通して、それで洪水が引いた後の新しい世界があったように、キリストにある新しい歩み、命にある歩みを始めることができるのです。

そして、ペテロはここで大事なことを話しています。「肉の汚れを取り除くものではありません」ということです。肉体の汚れ、つまり肉に宿っている罪をバプテスマそのものは取り除くことはできない、ということです。みことばを聞いて、信じて、既に清められた良心があって、その良心をもってイエスが主であることを表明して、バプテスマを受けるといいます。バプテスマによって救われるのではなく、救われたからバプテスマを受けます。

<sup>22</sup> イエス・キリストは天に上り、神の右におられます。御使いたちも、もろもろの権威と権力も、この方に服従しているのです。

主はよみがえられました。そして天に昇られて、神の右に着いておられます。そこで、主は御座におられる方として、ご自分に仕える霊である御使いだけでなく、墮落した霊ども、もろもろの権威や権力に対しても、力を行使しておられるということです。

こうやって、主は肉体においては死なれたけれども、そのことによってかえって、この世の霊ども、権威とか権力とか呼ばれているものたちを、従えておられるということです。私たちが肉体において、弱い者、卑しい者、栄光のない者に見えても、主にある良心のゆえにその苦しみをこらえるなら、よみがえられた主が力強く働き、霊どもも制してくださるということでもあります。権威や権力の背後にある、悪の勢力を制しておられるのです。

私たちは、どんなに小さい群れに見えても、このイエス様の働きに献身するのであれば、よみがえりの主が力強く働いてくださるのです。私たちではなく、キリストが現れるのです。